

肥満細胞腫

【犬の肥満細胞腫】

●プロフィール

- ・発生：皮膚肥満細胞腫は犬の全皮膚腫瘍のおよそ20%を占め、犬の皮膚悪性腫瘍の11~27%を占める。
発生状況は単発性がおよそ90%、多発性がおよそ10%。
発生部位は体幹から会陰にかけてが50%、四肢が40%、頭頸部が10%。ごく稀に内臓発生型あり。
- ・年齢：平均8.5歳齢（報告年齢 3週齢~19歳齢）。
- ・好発犬種：ボクサー、ボストンテリア、G/Lレトリバー、シュナウザー、ブルドック、ビーグル、ポインター、シャーペイなど。
ブルドック系統では低悪性度の発生が多く、パグでは低悪性度の多発性が多い。
- ・腫瘍随伴症候群：肥満細胞腫では、その腫瘍に合併して起こる 腫瘍随伴症候群が重要になります。
主な合併症として、消化管潰瘍（時に致命的）、血液凝固障害、肺水腫、低血圧、創傷の治りが悪い、腫瘍の急速な浮腫・発赤（ダリエ徴候）。
- ・ステージング
 - 0 不完全切除された単一腫瘍／所属リンパ節浸潤なし
 - I 真皮に限局した単一腫瘍／所属リンパ節浸潤なし
 - II 真皮に限局した単一腫瘍／所属リンパ節浸潤あり
 - III 多発性の真皮内腫瘍 or 大きな浸潤性腫瘍／所属リンパ節浸潤あり or なし
 - IV 遠隔転移がある腫瘍 or 転移を伴う再発*サブステージ (a) 全身症状なし (b) 全身症状あり
- ・組織学的グレード（悪性度）分類：Patnaik 分類
 - グレード I 高分化型（低悪性度）
 - グレード II 中間型
 - グレード III 未分化型（高悪性度）
- ・治療法：主に外科手術。十分な外科マージンをとった拡大切除術が必要。
外科手術不適応例や外科手術と併用して放射線療法。
グレード III 症例や脈管内浸潤あり、リンパ節転移や遠隔転移症例に対しては抗癌剤による補助的化学療法を考慮。
c-kit遺伝子変異陽性例では、イマチニブなどのチロシンキナーゼ阻害薬による分子標的療法も効果が期待出来る。
- ・予後因子：組織学的グレード（グレードIIIは不良）、ステージ（進行したもののほど不良）、細胞増殖指数、犬種、発生部位（マズル、爪下、内臓型は不良）、腫瘍随伴症候群（消化器症状のあるものや広範囲な浮腫・発赤があるものは不良）等々。

	術後1500日生存率 (Patnaik 1984)	術後1年生存率 (Murphy 2004)
グレード I	83%	100%
グレード II	44%	92%
グレード III	6%	46%

【臨床症例】

* 犬の肥満細胞腫

- ・ 症例：アメリカンコッカースパニエル、8歳8ヵ月齢、未避妊雌。
- ・ 主訴：1ヵ月前に下顎皮膚の腫瘍に気づき、拡大傾向を示す。
- ・ 症状：下顎および腹部の皮膚に腫瘍、一般状態は良好。
- ・ 検査：下顎の皮膚腫瘍は1×1×0.8cm、腹部の皮膚腫瘍は5×5×2.5cm。
両腫瘍の細胞診にて肥満細胞が確認される。
リンパ節転移所見・遠隔転移所見は見られなかった。
- ・ 臨床診断：皮膚肥満細胞腫。



下顎の腫瘍



腹部皮膚の腫瘍

- ・ 治療：外科手術による拡大切除術。
- ・ 確定診断：皮膚肥満細胞腫 ステージ III サブステージa。
下顎の皮膚肥満細胞腫 グレード II 深部マージンダーティー 脈管内浸潤なし
腹部の皮膚肥満細胞腫 グレード II マージンクリアー 脈管内浸潤なし
- ・ 経過：術後、ビンブラスチンによる補助的化学療法を行う。
3年5ヵ月後、子宮蓄膿症により自宅にて死亡したが、最後まで再発は認められなかった。

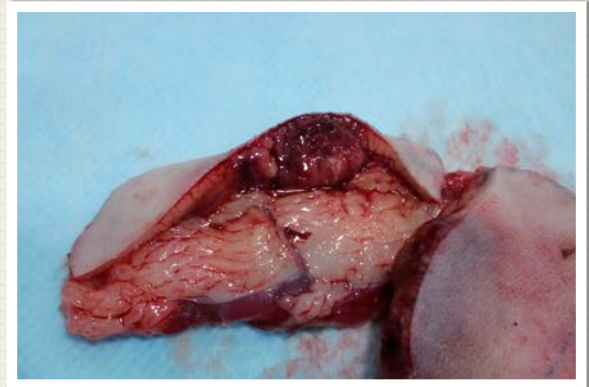
【臨床症例】

* 犬の肥満細胞腫

- ・ 症例：雑種犬、11歳齢、避妊雌。
- ・ 主訴：2日前に右腰部皮膚の腫瘤に気づく。
- ・ 症状：右腰部皮膚の孤立性腫瘤、一般状態は良好。
- ・ 検査：右腰部皮膚の腫瘤は5×3.5×2.2cm。
腫瘤の細胞診にて肥満細胞が確認される。
リンパ節転移所見・遠隔転移所見は見られなかった。
- ・ 臨床診断：皮膚肥満細胞腫。



右腰部皮膚の腫瘤



拡大切除した腫瘤

- ・ 治療：外科手術による拡大切除術。
- ・ 確定診断：皮膚肥満細胞腫 グレードII マージンクリアー 脈管内浸潤なし ステージ III サブステージa。
c-kit 遺伝子変異陰性。
- ・ 経過：術後、経過観察のみ。
2013年9月現在、術後2年1ヵ月経過するが再発・転移なし。

【臨床症例】

* 犬の肥満細胞腫

- ・ 症例：ミニチュアダックスフンド、2歳齢、未避妊雌。
- ・ 主訴：左頸部皮膚の腫瘤に気づく。
- ・ 症状：左頸部皮下の孤立性腫瘤、一般状態は良好。
- ・ 検査：左頸部皮下の腫瘤は2×1.5×1cm。
腫瘤の細胞診にて肥満細胞が確認される。
リンパ節転移所見・遠隔転移所見は見られなかった。
- ・ 臨床診断：肥満細胞腫。



左頸部皮下の腫瘤



筋肉も含めた拡大切除

- ・ 治療：外科手術による拡大切除術。
- ・ 確定診断：皮下の肥満細胞腫 マージンクリアー 脈管内浸潤なし。
- ・ 経過：術後、経過観察のみ。
2013年5月現在、術後10年6ヵ月経過するが再発・転移なし。



肥満細胞腫



【猫の肥満細胞腫】

●プロフィール（皮膚肥満細胞腫）

- ・発生：皮膚肥満細胞腫は猫の全皮膚腫瘍のおよそ20%を占める。
猫の皮膚肥満細胞腫は良性が多い。

発生状況	タイプ	サブタイプ	組織学的所見	平均年齢
	肥満細胞型	密集型	高分化（低悪性度）	10歳齢
	肥満細胞型	広汎型	低分化（高悪性度）	10歳齢
	組織球型		組織球様細胞	2.4歳齢

- * 肥満細胞型の90%は密集型：良性、独立した結節病変。
肥満細胞型の10%は広汎型：悪性、内臓転移や全身性播種を起こす。
組織球型：自然退行するので無治療。

- ・発生部位：皮膚型50%（頭頸部、耳介、眼周囲）、内臓型50%（脾臓、腸管）。
- ・年齢：平均8～10歳齢。
- ・好発猫種：シャムなど。
- ・治療：外科手術。
広汎型では補助的薬学療法も検討。
- ・予後：密集型では、外科切除だけで良好。
広汎型では、再発・転移が多く不良。

●脾臓型

- ・年齢：平均10歳齢。
- ・症状：食欲不振、体重減少、嘔吐、腹水、貧血など。
- ・治療：外科手術による脾臓摘出術。
90%の症例で肝臓などへ転移を起こすため補助的薬学療法も検討。
- ・予後：脾臓摘出による中央生存期間はおよそ1年程度。

●腸管型

- ・年齢：平均13歳齢（7～21歳齢）。
- ・症状：食欲不振、体重減少、嘔吐、下痢、腹水、貧血など。
- ・治療：外科手術。
補助的薬学療法も検討。
- ・予後：診断時にはすでに転移している症例が多く不良。

【臨床症例】

* 猫の皮膚肥満細胞腫

- ・ 症例：日本猫、13歳齢、未避妊雌。
- ・ 経緯：2年前に右上眼瞼の腫瘤に気づき経過を見ていたが1年ほど前から拡大傾向を示す。半年前に近医を受診、アブセスと診断され消毒処置および投薬治療を受けるも改善しない。さらなる拡大傾向を示したため、専門的な診断および治療を希望し当院へ転院。
- ・ 症状：右上眼瞼の皮膚の腫瘤、一般状態は良好。
- ・ 検査：右上眼瞼の腫瘤は大きく、表面は自壊しており、周囲には広範囲な浮腫を認めた。腫瘤の細胞診にて肥満細胞が確認される。右下顎リンパ節の腫脹が見られたが、遠隔転移所見は見られなかった。
- ・ 臨床診断：肥満細胞腫。



初診時の外貌



術直後



術後1年1ヵ月

- ・ 治療：外科手術による右眼球摘出も含めた拡大切除術および右下顎リンパ節廓清。
- ・ 確定診断：皮膚肥満細胞腫 広汎型 マージンクリアー 脈管内浸潤なし 右下顎リンパ節転移あり。
- ・ 経過：術後、補助的化学療法を提示するも希望せず経過観察のみ。術後1年1ヵ月までは再発・転移なし、その後追跡不能。

【臨床症例】

* 猫の脾臓肥満細胞腫

- ・ 症例：日本猫、11歳齢、避妊雌。
- ・ 主訴：1週間前からの間欠的嘔吐が見られ、2日前から食欲廃絶。
- ・ 症状：嘔吐、食欲廃絶。
- ・ 検査：脾腫を認め、他に軽度な貧血と白血球増加症が認められた。
脾臓の細胞診にて肥満細胞が確認された。
- ・ 臨床診断：脾臓肥満細胞腫。



摘出した脾臓

- ・ 治療：外科手術による脾臓摘出術。
- ・ 確定診断：脾臓肥満細胞腫。
- ・ 経過：術後、末梢血には肥満細胞が出現。
COPプロトコールによる補助的化学療法を行い、末梢血の肥満細胞は消失した。